



Lille Trille

鳴海

目を醒ます瞬間は、いつも怖い。

いるはずの人間と、いないはずの人間。

何が本当？ 何が現実？ 何が…。

ここは？ 僕は？

生きている？ まだ？

スレインは明るい硬質な天井を見る両目を右手で覆った。

同じ朝。あの日からずっと。

深く息を吸う。吐く。

…また、馬鹿な事を考えた。

タタタタ。

足音。

そう、僕は一人じゃない。

ピ、と電子音で扉が開く。ひよっこり顔を出したのは、黒いエプロンを着けた見知った顔。

スレインはその姿を認めて微笑む。

これが現実。大丈夫。まだ、大丈夫。

彼が口を開く。いつもの朴訥とした表情。

「おはよう、スレイン」

「おはよう、伊奈帆」

朝ご飯、出来てるよ。伊奈帆がキッチンに戻るのを見送って、スレインは起き上がった。

ダイニングでは、伊奈帆が茶を注いでいた。スレインを見て、聞く。

「出汁巻き卵とスクランブルエッグ、どっちが良かったかな」

朝の、決まりきったルーティンワーク。

「…出汁巻き卵、かな」

伊奈帆が笑った。湯気の立つ皿を手に持ち、近づく。

「当たり前」

卵三つを割って掻き混ぜ丁寧に焼いた、出汁巻き卵。六等分に切り分けられて、断面の渦巻が層を成す。

「いただきます」

「いただきます」

テーブルで向かい合う。白いご飯、味噌汁、出汁巻き卵、お茶。香り高い出来立ての料理。

卵の黄色。口に入れる。

甘い。

少し、塩味があつて。

香りがふわりと体を温める。

出汗巻き卵。

「美味しい」

「ありがと」

こんな穏やかな朝食を味わうようになって、もう三年。

伊奈帆は相変わらず、料理が上手だ。

「ねえ、スレイン。今日は何する？」

伊奈帆が、茶を注ぎたしながら聞いた。もう彼の食事は、ほとんど終わっている。

「そうですね。伊奈帆は？ 何かしたいことありますか？」

スレインは白米を咀嚼する。何回か口に運んでいるつもりだけれど、茶碗の中身がなかなか減らない。いつも不思議だ。

「二人でできることがいいな。ここ最近、一人で本ばかり読んでいたから。お互い」

大皿に二切残った卵を伊奈帆に勧めて、スレインは箸を置いた。

「じゃあ、今日はチェスでもしましょうか」

嬉しそうな視線が飛んできた。橙の瞳。

右も左も同じ色。

「いいね。久しぶりだ」

「戦績を覚えていますか？」

伊奈帆が得意げに鼻を鳴らした。彼の表情の変化というのは、年々分かりやすくなってきたように思う。彼の表情筋が豊かになったのか、自分が慣れたのか。

「十三対十二で僕の勝ち越し」

「今日は負けませんよ」

「こっちの台詞」

朝も夜も同じ光度の部屋の中、一日三度、食器の音が鳴る。

『楽しみにしている。何人いける？』

「五〜六人なら」

『オーケイ。では、合流ポイントで』

「ええ」

通信を終えると、図ったように扉が開いた。多分、聞いていたのだろう。

「お客さん？」

通信室の薄暗い明かりの中、伊奈帆の表情は少し不機嫌

だ。理由を考えると、まんざらでもない。スレインは微笑んだ。

「ええ、三日後に」

椅子の背もたれに肘を乗せて、伊奈帆が耳元で舌を鳴らした。行儀が悪い。

コンソールがスリープモードに移行し、チカチカと光る。「僕は、あまり好きじゃない」

至近距離で見上げると、伊奈帆の両目は眼前のモニタを見たまま口を鳥の嘴のように尖らせていた。分かりやすく拗ねている。

青白い光を浴びる彼の横顔は、戦時中を想起させた。地球のカタフラクトに乗ったことはないけれど、きつと精悍な表情で六面のモニタの青白い光を浴びていたのだろう。

…遠いな。

勢いよく凭れても、この椅子はびくともしない。当たり前か。

ぴ、ぴ、ぴ。

ヴー…ン。

そして、しん、という虚空の音。

この場所で暮らすようになり、自分たちは随分喋るようになった。

…もつと前から、喋れば良かったな。

最近、後悔ばかりだ。

「そう言わずに。食べ物が必要でしょう。点検もしないと」

「そうだけれどね」

「何、妬いてるんです？」

「そう」

素直だ。この素直さは、この場所で醸造されたもの。昔はこんなこと、言わなかったから。

無表情が懐かしくて、つい笑ってしまった。

「そこで笑う？　僕は本気なのにさ」

「ごめんなさい、可愛くて」

「年上ぶって」

「年上ですから」

伊奈帆がにやりと笑った。好きな顔だ。

伊奈帆の手が、椅子に座ったままのスレインの髪を掻き混ぜた。

「年は追い越せないけれど、背は、追い越すから」

スレインは笑った。

「いつになるでしょうね」

雄臭い臭い。卑猥な音。獣めいた呼吸。

ああ、くる。

「はあ…ん、あ、…っあ…」

貨物室の暗がり有難い。後ろで何度も立ったまま出されて、両足をだらだらと液体が流れ落ちて気色が悪い。

一応、体は反応して気分はそんなに悪くない。こういうことをする機会はずっと減った。穿つものを食欲に求める体は浅ましいが、自分の本質を突いているようで心地よい。…前は、一日に何度もしていたんだけど。

その時のことを思い出して、後ろが疼いた。

「おい、もう、ちよつと…足閉じろ」

スレインは眉を顰める。妙なところに当たって、あ、と声が漏れた。

こいつはさつきから舐め方とか脱ぎ方とか体勢とか、いちいち注文の多い奴だ。

…しかしこんなにノーマルでは、どうも良くない。痛くもないし、辛くもない。

「…んツ…っは…あ」

目を固く閉じて、現実を遮断する。

——葉の黄色。枝の鋭角。

彼の背の青。

肌寒い空気。

匂い。

銀杏と、彼の呼吸。

服越しに触れた。

あの手。

あの声。

あの、目。

『スレイン』

思い出したい。

界塚伊奈帆という男を。

「ふ…っ…う！ ああ！ あ…！」

手。硬い指先が躊躇いがちに肌を撫でる。囚人服の上から、肌を弄る軍人の手。その温度。まるで壊れ物、ガラス細工を触るように、丁寧に辿る道筋。初めて感じる感覚。気持ちいい、触れ合い。その指が触り、暴く。皮膚を。凹凸を。穴を。突起を。自分でも知らない、体の部分を。

「あアツ…！ は、あ…あツ！」

痛いくらい、胸が尖って苦しい。彼の手の感触を思い出して、両手で抓んで爪を立てる。硬い。痛い。すごく気持ちいい。

「はアッ…あ、…あ…あ！」

声。名前を呼ぶ。何度も。耳元で。熱い吐息に交じって届く、柔らかい声。恥ずかしくって、それに返答したことがなかった。呼んであげればよかった。何度だって。彼の

名前を。

伊奈帆。伊奈帆……。いなほ。ああ。何で呼んでやらなかったんだろう。たつた三文字の名前を。

体が錯覚して、奥が求めて熟れてくる。前へ後ろへ出し入れされて、達してしまいそうに体が強張る。

「ああッ……！ は、あ！ あ……つや、あ！」

目。左だけの橙。

……あいつ、キスするとき目を閉じないんだ。それに気付いたのは三回目で、繋がったまま理由を聞いたなら「会えない時のために見とこうと思って」なんて言つて。

あの目の中に、自分がいた。

僕だけを見ていた。

頭が真っ白になる。固く固く目を閉じる。瞼の裏に、掻き集める。ああ、いる。いる。ここに。ここに。

——伊奈帆。

「っ、くっッあ！ ……ああ、ア、ア……あ！」

ああ、どうして。

——どうして、こんなことに。

音はない。

冷たい床で火照った体を冷ましていると、足音が近づいた。

素つ気ない電子の音。

ふわりとかかる布。

下りてくる手の温かさ。

瞼をこじ開ける。心配そうな顔が見下ろしていた。

「……ね、大丈夫？」

「……見てたんですか？」

「うん。今日が初めてじゃない。……ずっと前から」

伊奈帆は横向きに寝そべっているスレインの視界に膝を抱えて座った。

頭を撫でてやりたいけれど、今触ると汚してしまう。それに、起き上がるのがこの上なく面倒だった。

「……気付いていたのは、知っていましたけど」

伊奈帆は膝の間に顔を埋めた。

「僕は嫌だよ。あんな風に言いなりになつてさ」

「……伊奈帆」

「うん」

「僕は、誰の言いなりにもなっていないですよ」

「……そうかな」

手をついて体を起こすと、節々が痛んだ。まともに抱かれても、あの短時間で八人は流石に多かったな。まだ、一人ずつで良かった。…案外、純情な連中なんだ。

——こんな体には、よく挿れられるものだ。

「貴方は、僕の言いなりになっていませんか？」

「僕が？」

「笑ってほしい。好きでいて欲しい。一緒にいて、ご飯を食べたり、チェスをしたり、時々喧嘩して、仲直りして。そんな日々を過ごしたい、という願いの…言いなりになっていませんか？」

伊奈帆はじつと目を合わせて考えて、首を振った。

…僕は伊奈帆の、こういう所が好きなんだ。

「僕は、君が好きなんだ」

声は震えていた。

しんと静まり返った暗い場所。今更、臭いに気が付いた。いつまでもいるようなところではない。

「…それは、本当に貴方の気持ちですか？」

「…信じられない？」

スレインは首を振った。

「僕は、僕が信じられない」

スレインが伊奈帆と呼ぶ。だから、僕の名前は伊奈帆らしい。

僕は、気が付いたらこの場所にいた。

もう何年前かな。少なくとも、この場所で三回は誕生日をお祝いしてもらったから、三年はここにいるんだろう。その前にどこにいたかは、知らない。

ここには、僕とスレインの二人だけしかない。

この場所を全部歩き回ると、四時間くらいは掛かるかな。部屋は沢山あるけれど、僕たちが使っているのは十にも満たない。

キッチン。

隣接のダイニング。

それぞれの個室。そこにバスもトイレもある。

通信室。

貨物室。

メンテナンスルーム。

そして、ブリッジ。

あとは、客室が沢山と、医務室。更衣室や共用バスルームなんてのもあるけれど、使ったことはない。

僕らは、大体一日中、ダイニングにいて二人で過ごす。思い思いに過ごし、お腹が空いたら食事を僕が作る。スレインは少し食べる。残した分は、勿体ないけれど捨てる。時間が来るとそれぞれ個室に移動して、シャワーを浴びて眠る。ずっと前は風呂も寝るのも一緒の部屋だったらしいけれど、どうして別になったのかは知らない。覚えていないんだ。

スレインは時々、通信室で他の船と連絡を取り合う。物資の受け渡しのためだ。食料や水、生活物資などの荷物の対価は、マネーと暴力。僕はこれが好きじゃない。でも、スレインはそれほど嫌じゃないみたいだ。何でそう思うかって言うと、「お客」が着た後はいつもより無口になって、遠くを見ているから。僕が見えていないみたいに感じる。ことがあつて、きつとこれがスレインの素顔なんだなと思うんだ。そういう顔は、二人だけの生活が長くなると見つけることが難しい。僕という時は、年上ぶって本音を隠すから。だからほんの時々は、ああいうことをしてもしょうがないのかな、と思う。

ブリッジに出向く必要はほとんどない。操縦はオートだ

し、目的地があつて移動しているわけではないとスレインが言っていたからだ。月に数度、ブリッジのメインモニタに映る一面の星の海を眺める。今宇宙のどこらへんにいるのか確認して、「遠くまで来たね」なんて笑い合う。まあ僕は、どこから来たのかも知らないんだけど。

僕は、気が付いたら宇宙の真ただ中を漂う宇宙船の中にいた。目を開けた瞬間視界に飛び込んだきた碧の瞳に導かれて、今もこうして暮らしてる。

ベッドの上に寝そべって本を読んでいると、コンコンコン、と控えめなノックが響いた。

「伊奈帆」

スレインの声。いつもの優しい声だ。

「キー、空いてるよ」

「入っていいですか？」

「うん」

ピ、という音は、こんなに大きかったかな。

スレインは困ったように笑って、戸口に立っていた。

「もう寝る所でしたか？」

「全然。本を読んだ」

起き上がったぼんぼんとベッドの端を叩くと、スレインはそこに座った。

「アイザック・ニュートン？」

伊奈帆は照れくさそうに本を膝に乗せた。

「五回目だけど、面白い」

スレインは開いたページに顔を寄せた。右手が、邪魔そうに髪を掻き上げた。

お風呂上がりの香りがして、ちよつとどきどきする。

伊奈帆はずつと聞きたかったことを聞くことにした。姿勢を少し正す。

「地球って、どんなところ？」

スレインが一瞬動きを止めて、遠くを見た。

「…美しい星です」

「何があるの？」

「空と、海」

ソラ。ウミ。綺麗な名前。

「青いって、本当？」

「ええ」

「形の違う、生き物があるって」

「ええ」

「飛ぶって本当？」

「ええ。本当です」

伊奈帆は後ろに倒れ込んだ。見上げる天井はいつもと同じだけれど、目を閉じると青い色が浮かぶようだった。

「すつこいなあ」

そんな広い、大きな所。想像もできないな。

「…行きたいですか？ 地球に」

「うん」

スレインも、白く照らされた天井を見た。

埋め込まれたLEDライトの明かりを、しばらくの間二人は黙って見上げた。

「…今日は、一緒に寝てもいいですか？」

「いいよ」

ベッドの端に身を寄せる。スレインがそつと体を横たえて、掛け布をふわりと掛けた。

明るい部屋。

白くて硬質な天井。

スレインの匂い。

お風呂上がりのの、いい匂い。

「ねえ」

「はい」

静かな声。いつもの通りの。

——フラッシュバックする、昼間聞いた、濡れた声。

「お客とすること、僕とはしないのはどうして？」

「…」

痛そうな声だけれど、それだけじゃないのは分かる。細い隙間から、スレインの手がお客の背中を掴んだのを。足が、腰を引き寄せたのを見たから。

「あれは、嫌いな人とすること？ 好きな人とすること？」

顔を向けると、スレインと目が合った。微笑んだみたいだけど、今まで見たどんな笑顔より下手だった。

「…本当は、好きな人とするんです」

「僕が嫌い？」

首を振った。スレインはいつも、僕に優しくしてくれる。分かりやすく、話してくれる。

「僕は伊奈帆が大好きだから、したくないんです」

光が、はつきりと涙を浮かび上がらせた。一筋。二筋。

三筋。

泣かせてしまった。初めて。

「変なこと聞いて、ごめん」

見ていられなくて、背中を向けた。白く明るい壁を見る。

「ごめんなさい、伊奈帆」

スレインの手が僕の髪を撫でた。

この手。触ったことはあるのに。今は手が伸ばせない。

「ねえ、スレインは僕のが好き？」

「とつても」

嬉しい。でも、何でそんな悲しそうな声で言うんだろう。

「僕、スレインが宇宙で一番好きだよ」

スレインが手を引いた。

「おやすみなさい」

「おやすみ」

好きなのに、どうしたらいいのか分からない。

笑ってほしいだけなのに。

ざあざあざあざあ。

——何の音？

目を覚ました伊奈帆は、隣に誰もいないことに気付いた。もう、温度はない。

昨日、確かに一緒に寝た。

ざあざあざあざあ。

水音。多分、シャワーの音。

ざあざあざあざあ。

「…スレイン!」

心臓がどかどかと走り出して、伊奈帆は飛び起きバスルームへ掛けた。電子の扉がもどかしい。ピ、ピ、と二回扉を開いて、オープンにする。

ざあざあざあざあ。

飛沫。

溜まり。

排水溝に吸い込まれる水。

赤い。

いた。

金の髪。白い肌。細い手首。そこから線になって流れる赤い色。

目の色が見えない。

「スレイン!!」

抱き起そうとするが、脱力していてすごく重い。名前を叫びながらあちこち触っていると、薄らと瞼が開いた。

「…ああ、伊奈帆」

消えそうな声だ。震えている。気付いて伊奈帆はシャワーを止めた。冷水。

「何、どうして!」

赤い。赤い。赤い色。床も、服も、左手首から下も。

「…ごめんなさい」

青ざめた唇が動いた。蒼白な顔を触ると冷たい。

何だこれ。何が起こった?

「えつと、どうしたらいい!? この赤いの止めないと」

力任せに掴む。伊奈帆の手も赤く染まった。

「これは、血」

「血…」

「生き物を殺すと、流れる…」

「生き物…」

スレインの右手が、伊奈帆の前髪を掻き上げて頬を撫でた。

「貴方にも、血が流れている」

「僕にも?」

「…でも、赤くはない」

赤くない?

「何、なんのこと?」

ぼたり。ぼたり。ぼたり。

何の音。

血…が。落ちて。

殺すと、流れる？

死ぬってこと？

スレインが悲しい顔をした。いつだって悲しそうな空気を纏っていたけれど、こんなのは初めてだ。死にたい、という顔。こんなに悲しい顔ってあるんだろうか。

次の言葉。

「…あなたは、ミュータント」

唇の動きが、はつきりと見えた。発声された言葉が、はっきりと聞こえた。

何？

「ミュー…？ タント？」

ミュータント？ って、突然変異体？

どういうこと？

血が、赤くないって？

「伊奈帆と僕が、作った」

「伊奈帆は僕だよ」

スレインが目を閉じた。眦から、涙がこぼれ落ちた。

「…もう一人の。…もういない」

お客が帰った後は、よく目を閉じていた。

そうか。

そうか、スレインは。目を閉じて。

瞼の裏を見ていたんだ。

「スレイン…？」

「君が孵った。彼は死んだ。この船の中で」

「孵った？」

「卵、から」

——僕は産んだ。

「どう、どういうこと？」

動かない。

手を握る。大きな手。でも細い。

頭を抱える。重い。

体を掻き抱く。腕が何とか周る。大人だけれど、細い体。

背を、追い越すって言ったのに。全然足りない。

卵の殻を破って産まれた八年目の伊奈帆は、産まれて初めて泣いた。

流れ落ちた涙の色は、地球の海のように青かった。

「はーっ…はー、はー、はあー、あ、はあっ…！」
苦痛に塗れたそんな声でも、聞けることが嬉しいと感じる。

「あああ、はあっ…、は…あ、ああ…っはあ…」
ガラスの向こう側。もう何度繰り返された光景だろう。
拘束された両腕。仰け反る裸体。百八十度に近く開いた、
足の間。

びー。

ランブが赤から緑へ。
産まれた。また。
孵ることのない、卵。

きっかけは、何だろう。

この実験施設に移されてから？ 僕の名目が軍人から研究者に変わってから？ 彼の処遇が戦争犯罪者から、被験者に変わってからだろうか。卵を産み始めてから？ セツクスしたから？ いや、多分、もっと前。

彼の髪に葉が落ちた。

——きつと、そこから。

「散歩しよう」

面会室。伊奈帆の言葉にスレインは眉を寄せた。

「…どこを？」

「中庭」

「何で？」

「今、何月か知っている？」

スレインは首を振った。最近はどういうジエスチャー交じりの会話が楽しめるようになり、密かに嬉しい伊奈帆だった。

「知らない」

だろうな。カレンダーもないし、室温は管理されて一定だ。

「十月。秋だよ」

「それで？」

「銀杏が綺麗なんだ」

だから、見に行こう。

「…ああ」

スレインが自分から立ち上がった。それも嬉しかった。

中庭は狭くて、コンクリートの壁に囲まれた長方形の中にベンチが一つ、桜が一つ、銀杏が一つ、手入れしていない花壇が一辺に沿って雑草を生やしていた。

まだ、二回目だ。ここに来るのは。最近、ようやく制限が緩くなった。

「どう？」

スレインは金の扇に彩られた木を見上げ、目を閉じ大きく息を吸った。

「綺麗。…匂いにする」

足元には、落ちた実が転がっていた。中から、種が覗いている。

「実の臭いは独特だけれど、種は美味しいよ」

「種を食べるのか？」

「こう、殻を割って、中身を食べるんだ。もちもちしていて、美味しい」

足元の潰れた銀杏を摘み上げて、伊奈帆は説明した。

「茶碗蒸しとかに入れて」

「チャワンムシ？」

そっか。知らないか。

「プリンみたいな」

スレインが頬を緩ませた。こんな表情も、見せてくれるようになったんだ。

「ああ、また卵料理か。好きだな、お前」

プリンが卵料理だと知っていたとは、ちよつと意外。食べ物には、関心がないと思っていたから。

「美味しいよ」

「ふうん」

いつか、ご馳走するよ、と言いたかったがやめた。当てのない約束は無責任すぎる。

秋風が黄金に燃え立つ木を揺らした。ひらひらと金の欠片が散る。

「寒くない？」

「別に」

鳥肌は立ってないみたいだけれど、自身の体調に関して、彼の言うことは適当だと知っている。

「平気？ やせ我慢？」

「平気」

「あ、そのまま」

「え？」

スレインの頭に手を伸ばす。スレインは微動だにせず、

手ではなく伊奈帆の顔を見た。

黄色の葉っぱが一枚。茎を指に挟んで、くるくると回す。

「…髪についてたから」

「…ああ、ありがとう」

その笑顔。ほっとしたような。

髪に銀杏が落ちて、それを僕が取った。

初めて髪に触れて、近くで目が合った。

時が止まったような澄んだ目で見返した。

きつかけがあつたとすれば、それ。

「スレイン」

返事はない。

横たわった寝台は白。壁も。テーブルも椅子も、彼の肌も。

服は着ていない。意味がないから。

テーブルにトレイを置いて、ベッドに腰かける。目が緩慢に僕を追った。

どこ見てるんだろう。目かな。口かな。それとも、鼻とか。もう分からない。

背中に腕を入れて、体を起こす。素直に体に力が入り、スレインはベッドの背に凭れた。立ち上がり、トレイを運ぶ。膝の上で、スプーンを取り上げた。

「今日はさ。シチューだよ」

白くて粘性のある液体に塗れた人参を、小さく砕いて一掴み。顎を掴んで、口を開く。そこに流し込んだ。咀嚼せず、嚥下。

「嚥んだ方がいいと思うけど」

「そういえば、好きな食べ物とか、あんまり知らないな」

「明日は、何が食べたい？」

「コーンスープか、ポタージュ…味噌汁もいいかな。それかお澄ましにしようか。麴があるし」

「結局、一回も茶碗蒸しを食べさせてあげられなかったな。ごめんね」

——この期に及んで卵を食べるなんて、気が狂いそう

スレインが卵を産み始めたのは、今から一年前のこと。初めは、鶉の卵くらいの大きさだった、らしい。

蛋白質の塊。無精卵だった。

分析すると、アルドノア因子が微量に含まれていることが分かった。

それから一週間後、また卵が産まれた。それも、鶉の卵くらい。週に一度の産卵は、三か月、続いた。

そこで漸く、僕は知った。そう。三か月も経つてから、彼の体の異変を知った。

その時の気分と言ったら。世界がひっくり返ったような、夢と現が正反対になったような、とにかく壮絶な気分だった。頭が割れそうに痛かったし、かなり吐いた。三、四日は、食べ物や喉を通らなかった。

原因も分かった。卵を産んだ日は全て、面会日の次の日。これがどういうことか、すぐ他の連中も分かった。

——僕を産んでいたんだ。彼は。

「痛くない？」

話しかけても返事はない。もう、ずっとそうだ。

遮るものなにもない、反応の薄い体を愛撫する。この場所ですることといったら、それだけ。

産卵のための交尾。

手の甲にキス。次は肘。肩。首筋。脛。頬。耳朶。

唇。舌を入れると、中はじつとりと生ぬるい。舌を吸って、歯列をなぞる。舌先を咽喉まで差し込む。

手で、胸を揉みこみ弄る。柔らかかった突起はすぐに固くなった。指の間に挟んで、ぐりぐりつつねる。

前はこれ、好きだったのに。ここだけでイった時もあつたつけ。あの時の恥ずかしそうな顔は最高だったな。

口を離して目を覗き込む。緩慢に瞬きを繰り返す目は、霞みが掛かったようだ。

呻き声一つない。兆しのある場所を口に含んで、音を立てて刺激する。硬さを増して大きくなるが、やはり声はない。時々、生理的に背筋が震えるくらい。後孔に指を添わせると、吸い付いてきた。人差し指を捻じ込むと、中はすぐ蕩けそうに熱い。昂ぶりから口を離し、涎と先走りを指で掬って塗り付ける。穴の中を掻き混ぜて、指を増やす。きゆうきゆうと締め付けが始まり、呼吸が少し早くなった。体は反応しているが、死体でも抱いている気分だ。

「…声が、聞きたいな」

結局、僕の記憶の中にだけある君が出す声は、押さえて

堪えてほとんど聞こえなかった。こんな寝心地のいい場所でもなかったし。

落ち葉に覆われた地面の上とか。

水溜まりの乾ききらないコンクリの上とか。

雪の上。

木の幹に押し付けて立ったまましたり。

そういうや、ベンチの上で乗っかってもらったこともあったな。

いつだって、見つからないように急いで達した。服だつて着たまま、ちよつとずらして。汚れないように、体を密着させて。唇を合わせたまま、目だけを見て。

君の声を、口の中で聞いていた。

ベッドの上なんて、こうなつてから初めて経験した。

我に返ると、自分も限界が近かった。昔の君を思い出して勃起なんて、引かれるかな。浮気ではないと思うんだけど。

押し付けると、内壁が迎え入れるように収縮した。熱くて、すごく気持ちいい。奥が呼んでいるのを感じる。

——卵が。

ぞつとした。

どうしてだろう。誰か、知っていたら教えてほしい。

僕らは、そんなつもりじゃなかった。

ただ、髪についた銀杏の葉が綺麗で。

触れた髪が細くて。

澄んだ目がどこか懐かしくて。温かくて。

一緒にいたいって。

心が寒いからくつつきたいって。

それだけなんだ。

卵。

無精卵。

宿らぬ命を温める手。

その手は。

——。

——僕が、繋いでいたかった。

「つは……。ね、出すよ」

腰を打ち付けながら、顔を近づける。浅く速い呼吸の間。見開いた目を覗き込む。

この時だけ。

この時だけ、目が。

瞳孔が収縮し、白目が澄んで青くなり、虹彩の色が美し

く現れる。

「スレイン……！」

この時だけ。彼が戻ってきたみたいだ。

限界を察した中が反応して、ぐねぐね蠢く。

「……！　っ……は、あ」

吐精。最後の一滴まで搾り取るように締め付けを繰り返して、動きが止まった。ずるりと引き抜く。ゆっくり閉じた瞼に唇で触れる。

「愛してる」

聞こえていないかもしれない。

……聞こえていたらしいな。

「調子はどう？」

今日は椅子に座っている。服を着て。

卵ができると、彼は服を着る。締め付けのない貫頭衣。

色は、前と同じ。

椅子に座って、腹部に両手を当てている。宝物を確かめるように。

時々撫でて、手を重ねて、また撫でて。

表情は、心なしか穏やかに見える。

「今日は、ミネストローネだよ」

口を素直に開く。そこに匙を入れる。咀嚼音。

卵を育てているときは、服を着るし、噛む。排泄や洗体も、自分でする。卵の為に。

「調子、良さそうだね。今日は髪を切ろうか」

肩まで伸びた、長い髪を触る。

もうこの髪を、葉が飾ることはないのか。

そう。スレインが卵を産んだ話。

卵は次第に大きくなっていった。

一つ目から三か月後。もう十四個の卵が産まれ、そして奪われていた。僕が気付いた時には、大きさはもう鶏卵よりも大きくて、無菌室でマスクを着けたまま直視した現実

に氣を失いそうだった。その数日後、彼に会った。

面会室から、逃げるように中庭へ手を引いた。

ベンチに並んで座った。

スレインは何も言わない。

僕は、八つ当たりだけれどそれにも腹が立って。

どうして言わなかった、と酷い言葉を浴びせてしまった。自分を殴りたい。

言えるわけないだろう。

信じられなかったのかもしれない。

スレインは僕の言葉に傷ついた素振りを微塵も見せずに、葉を落とした銀杏を見上げ淡々と告げた。

「隠して温めてみたのだけれど、それも取られてしまった。卵は孵っているのだろうか？」

その日、僕は彼を泣きながら抱いた。

ガラスの向こう。

両手を吊り下げられて、膝立ちの恰好。服は、来ていない。それを取り囲む白衣。

白い死神のようだ。

この、産卵室で卵を産み落とす瞬間だけ、彼は声を出す。尾を引く悲痛な悲鳴。

それでも、聞きたい。彼の声。

「うああ、ア、ああ、つは、ああ——！」

ツルリ。四つの手が分娩台に落ちる前にキヤツチする。

鴛鴦の卵のような大きさ。

——また産まれた。

「……スレイン？」

眠っている。

産卵の後、死んだように眠る。三十時間くらいは、目を覚まさない。

見下ろす。寝顔を見るようになったのは、こうして二人でモルモット扱いされるようになってからだな。もう彼は囚人じゃないし、僕は軍人じゃない。

アルドノア研究のための実験体。

「ねえ、どこか、誰も知らない場所へ行こうか」

明り取りの小窓から、夜空を見上げる。今日の月は三日月。

こんな風に目を細めて、僕の名前を呼んだよね。界塚、つて。

まだ、手も握ったこともなかった時。

髪に触れたこともなかった時。

君の心が見えた時。

「二人だけでさ。船に乗って」

髪を撫でる。月色の髪。

この髪を、星屑で飾れたらどんなに素敵だろう。

「宇宙を。星の海を旅して」

気が付くと、スレインの両目が僕を見ていた。

大きく開いて。

三日月のように弧を描き。

閉じた。

僕は、スレインを担いで逃げた。その時、人を八人殺した。

殺された卵の数に比べたら。そう言い聞かせて走った。

「宇宙に行こう。二人きりで暮らそう。もう、卵を割らせるもんか」

スレインが、口笛のような呼吸を漏らした。

シャトル発着場へ、血にまみれた体で向かう。目星はあった。勝算も。だって、僕にはすることと言ったら、家事と交尾しかないんだから。余計なことを考えて計画する時間は腐るほどあった。

アルドノアの実験施設というのは、都合のいいものが沢山あるんだ。

ヴーン…。

ジジジジ。

ウィー…ン。

大きな機械。変なスイッチ。よく分からないごちゃごちゃとした配管。

この部屋が何のためにあるかなんて、小さい頃は考えたこともなかった。

青い涙を流す伊奈帆は、自身の制作物に近づき、見下ろした。

「何か、話してみて」

見下ろすのは、少しだけ背丈の低い少年の形。しかし、生き物と言えるかどうかはわからない。材料の九十九パーセントは、代替の利く物だ。

作るのに。…生み出すのに。十年も掛かってしまった。

「貴方は誰ですか？」

開いた目は、まだ見ぬ星の色。

やっと会えた。伊奈帆は少し屈んで微笑む。

「僕は伊奈帆」

一度瞬きをした。小さな口が開く。

「僕は誰ですか？」

伊奈帆は十年ぶりに、他者の名を呼んだ。

「君はスレイン」

「スレイン」

「名前だよ」

スレインと呼ばれた人工物は、眼球を動かして周囲の状況を確認した。この瞳の色が、伊奈帆は少しだけ不本意だ。右目は大好きな色だけれど、左は違う。

スレインの部屋で見つけた、眼球を模したデバイス。それを埋め込んだ。なぜって？

この小型デバイスの記録は、全て見た。何回も。

大体、分かった。

人間というものの。世界というものの。戦争というものの。自分の生まれた理由。

伊奈帆という名の男が、どんな男で。

彼がどうして、いなくなったのか。

捨てても良かったんだけど。スレインの抜け殻に、供えても良かったんだけど。でも、やめた。未練がましく、スレインに似せた形を造り、その左目にこれを埋め込んだのは。

ここに心があるのかな、と思って。

金の髪を揺らして、スレインと自己を認識した。ロボットは声帯を震わせた。

「伊奈帆とスレインはどういう関係ですか」

伊奈帆は言った。

「友だちだよ」

「トモダチ」

手を差し出す。初めてする、人間のジェスチャー。

「よろしくね、スレイン」

「よろしく、伊奈帆」

手は、握られた。少し小さな白い左手に。

スレインをブリッジに連れて行き、伊奈帆はメインモニタを作動させた。

星たちの煌き。白。青。赤。横目で見ると、スレインはじつと星々を眺め顔や髪が星の光に照らされて不思議な色に染まっていた。

綺麗。

伊奈帆は、チエアーに腰を下ろし操縦桿を握った。

「地球に行こう」

スレインが立ったまま言う。

「地球とは、どこにありますか」

「ずつと遠く。そこにはさ、面白いものが沢山あるんだ」

「面白いもの？」

伊奈帆はスレインに座るよう指示して、モニタの中に青を探そうとした。

スレインの瞳が映したに違いない青を思い描く。

「青い空と、青い海。色んな形の生き物たち」

本でしか見たことのない世界。本当に、あるのだろうか。いや、あるだろう。そうでなければ、スレインの瞳がこんなに美しく透けるわけがないのだ。

地球という場所の美しいものを、スレインは瞳に閉じ込めていた。だからあんなに、綺麗だったんだ。

「僕らみたいな：ちよつと変わった生き物もさ、きつと幸せになれるよ」

スレインが伊奈帆を見て聞く。

あ、ちよつと似てる。僕も中々いい腕してる。

「幸せ？」

「笑えるってこと」

「笑う……」

黙り込むスレインに、伊奈帆は笑ってみた。見本を見せるように、口を大きく開いて。

「ほら、笑って」

「こうですか？」

目がまん丸で、鼻がひくひくしていて、口は歪んで左右バラバラ。伊奈帆はぶつと吹き出した。

「いいじゃん。可愛い」

ミュータントとロボットを乗せた宇宙船は、星の海を突き進む。伊奈帆は口を開いた。

「空を飛ぶ生き物。まるで、御伽噺だ」

スレインの左目が、一つの生き物のデータを映し出した。

「海猫という鳥が、インプットされています」

「どんな鳥？」

「白くて、翼があります。海の上を飛ぶ生き物です——」

——十八年前。メンテナンスルーム。

「孵った」

二十一歳十一カ月三十一日を二分前に終了した界塚伊奈帆の言葉。

「人間の形をしている」

彼が取り上げたのは、小さな人間。頭が大きく。手足を折り曲げた人間の胎児。卵の殻を破り、出て来たもの。

「スレイン、ほら」

振り向く。視界に、彼の愛する青年。

十か月と十日ぶりに発声を目的として口が開く。

「…伊奈帆」

二年と六か月十七日ぶりの言葉。

跳ね上がる心拍。

「スレイン？」

微笑みを認識し、体温が下がる。

「ああ、産まれた」

産まれた。脳が言葉を反芻する。

「うん、産まれた」

抑制された声。しかし心拍は次第に速くなる。

伊奈帆は目を閉じ、理解した。

彼の声も、眼も、両腕も、心も、卵の為のものなんだ。

そこから生まれる命の為の。

僕は、もうその瞳に映らない。

それでもいい。

伊奈帆は胎児を手渡す。スレインは大事そうに胸に抱いた。

数年越しの笑顔につられる。

「やっぱり、笑顔がいいね」

スレインは目を閉じて、赤子に頬をすり寄せている。

「伊奈帆…」

まだ、名前覚えてたんだ。

急に腹が減った。スレインはほとんど食べないし、ここ最近では伊奈帆も食事を抜いて

いた。宇宙空間で、物資は貴重だ。あと三十日、なけなしの食糧で食いつながなければいけない。

でも、今日くらいはいいだろう。バースデーパーティーだ。二人分の。

「今日は、何が食べたい？」

ぎよろ、と両目がはつきり僕を見た。

「お前が」

食べたい。

「僕を？」

問い返すと、にやりと笑った。青い赤子を抱えて。

伊奈帆は後ろ手で後頭部を掻く。

——まいったなあ。

僕か。

でも。そういや。

好きな食べ物を初めて聞いた。

あんなに食べることが不得意だったけれど、あつたんだな。好きなもの。

そうか。僕か。

予想とは違ったけれど、まあいいか。

何かが食べたいなんて、彼の口から初めて聞いたし。

…うん。結構、嬉しいかも。

「いいけど、残さず食べてよ」

好き嫌いせずにな。

Lille Trille

発行日 2019 年 9 月 26 日

著者 鳴海
<https://www.pixiv.net/member.php?id=955950>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
